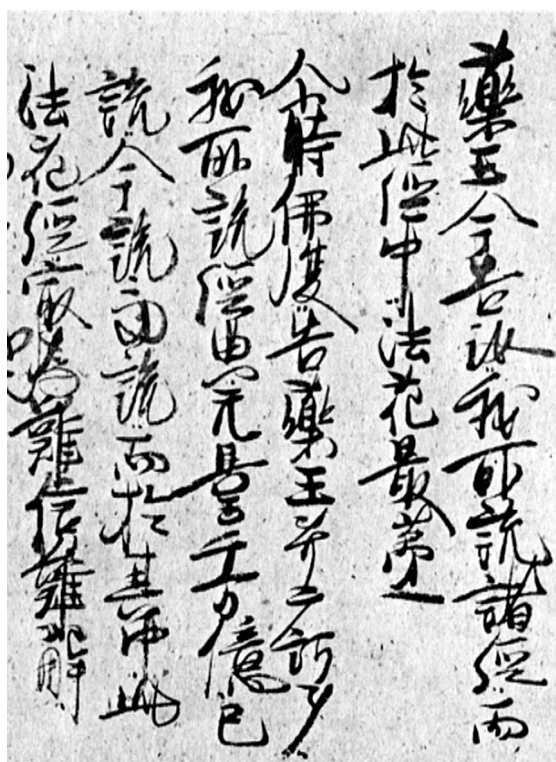




今月の御聖訓



〔藥王今〕汝に告ぐ。わが説く所の諸經あり。しかも

〔藥王今〕告レ汝ニ。我ガ所説諸經アリ。而モ

（この經の中において、法華が最も第一なり」と。）

於一此經中一、法華最第一ナリト。

（その時に仏、また藥王菩薩摩訶薩に告げたまわく、

爾時仏、復告ニ。藥王菩薩摩訶薩ニ、

（わが説く所の經典は無量千万億にして、すでに）

我所説經典無量千万億ニシテ已ニ

（説き、今説き、まさに説かん。しかもその中において、この）

説キ、今説キ、当ニ説ク。而於ニ其中一此ノ

（法華經は、最もこれ難信難解なり。）

法華經ハ、最モ難信難解一。

【断簡二四七 新定二六六二頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
お講義話「一念三千について」	菅野憲道	2
御書と日興上人〔172〕	松田銘道	8
「興風談所の研究成果(九)」	菅原関道	10
【採過拾新録】「予の好める人物」		14
読書案内『日蓮』	松田銘道	19
【寄稿】「地球温暖化をくい止める方法」	宮崎和子	20
恵日俳壇		21

七月の行事 文月詠草 恵日俳壇

巻頭言

自縄自縛

菅野 憲 道



創価学会は戦後の再建期から臆面もなく軍隊組織を取り入れ、オーガナイザーとして旧軍関係者も大幹部に多く登用しているから、意図的に独裁的ピラミッド型の教団組織を構築したのだろう。（宗教団体が軍隊組織を真似たこと自体、異常だが）支部、地区、班、組の系統組織と会長直属の青年部部隊組織は機動力や動員力において民間の組織では並外れたものがあつた。日大講堂の本部総会などに幾度か参加したことがあるが、軍楽隊の演奏で軍歌調の歌「花が一夜に散る如く、俺も散りたや旗風に……」などと演奏がくり返えされて雰囲気盛り上げ、社会主義独裁国家に見られるような統制された中堅幹部の一条乱れぬ大拍手に参加者は一体化し会長が登壇する頃にはピークに達するように訓練されていた。

「組織は戸田の命だ」という指導が流され、上意下達の指導主義と相まって閉鎖的で排他的な教団に、過大に演出された疑似カリスマ指導者が登場しても誰も不審に思う人はいなかった。組織に埋没して主体性を失った幹部からは異を唱えるどころか、一時青年部の中に「我われは先生の紅衛兵になろう」などと檄が飛ばされたこともあり、内部粛清や、ゴマすり、お追従が幅を利かせてきた。

創価学会は三代会長の神格化で教団の拡大を図ってきたが、いまやその実像は白日の下にさらされ、隠しても隠しようがない。会としてはこれを切り捨て再建の方途を探るべきが本道だが、教団はその幻影に呪縛され、生ける亡霊と化した名誉会長とともに風化し衰退してゆくのを手をこまねいている他はないのだろう。自縄自縛とはよくいったものだ。永遠の師などと齒の浮くような阿諛おもねりを言っているが、まもなく何と短い永遠であるかを思い知るだろう。

日蓮正宗として、保身のためとはいえ、管長を崇めすぎて権威と権力を一極に集中したから、いまさら独裁の不平不満を並べてみても自縄自縛という他はない。それにしても名字初心位に住し、慈悲と忍耐、正直為本、少欲知足を旨とする宗旨とはあまりにもかけ離れてはいないか。

お講講話(要旨)

拝読御書 「観心本尊抄」(全集二四〇頁)

一念三千について

菅野 憲道

《一念三千の出处》

「観心本尊抄」は、冒頭に、

「止観の五に云く『夫れ一心に十法界を具す、一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す。此の三千一念の心に在り』(「一代聖教大意」全集四〇二頁)

と、摩訶止観第五巻の文が引用されておりますが、この文が一念三千の出处です。

一念三千とは 分かりやすくいえば、いまの一瞬に起こるわずかなこころの作用に、あらゆる現象世界の作用全体がそのまま具わっているというものです。三千とは「無尽の異名」でもあつて限られた数量ではありません。これは「心は是れ一切法、一切法は是れ心」とも説かれるように、一念即三千、三千即一念でもあります。およそ一切の現象はそれ自体が単独で孤立しているのではなく、個と全体が互具互融し、二而不二とみるのが天台の究極の観法です。

この一念三千の教理は、天台大師が、この止観第五でただ一回しか述べておりませんが、妙楽大師はこれを「終窮究竟の極説」という最大級の賛辞をもって讃え、一念三千観をもって「指南」とするのが天台大師の本意であると断じております。爾来、十界互具・一念三千は仏教の精華にして究極の教えであり、このことはどの宗派でも認め、かつ多大な影響を受けております。日本でも天台三大部伝来以来、色々な分野にも影響を及ぼして、例えば「源氏物語」とか「徒然草」などにも、法華経や摩訶止観が引き合いに出されており、思想的なベースになっているのです。

「夫れ一心に十法界を具す」(同)

とは、我われの一瞬の心に、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界が具わっている、仏法でいう十種類の世界が具わっている、その上に十界互具といって、例えば修羅界にはまた地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界が具わっている、それで百法界で、その百法界にさらに三十種の世間、これは方便品の十如是といって如是相(外見的な姿)、

如是性（本質）、如是体（本体そのものの）、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟と、それぞれ違った視点から分類できる十種の如是有り、その十如是に五蘊世間・衆生世間・国土世間の正報・依報の三世間がそれぞれにあるのでこれを掛けると三十種の世間になり、これを合計すると百界×三十種世間で二一心に三千種の世間を具すということになります。

我われの微かな心にも十界が具わる証拠には、みんな同じ顔のように見えていても、よく見ると違うのです。

「数^{しばしば}他面を見るに、或時は喜び、或時は瞋り、或時は平かに、或時は貪り現じ、或時は痴か現じ、或時は詭曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、痴かは畜生、詭曲なるは修羅、喜ぶは天、平かなるは人なり。」（全集二四一頁）

とあるように、刹那の心にもそれまで潜在していた煩惱や業が悪縁に触れて表面化して瞬時に食欲（餓鬼）・瞋恚（地獄）・愚癡（畜生）等の心に占拠されてしまうことがあるものです。

いまの世間には「欲に目がくらんだ」とか「切れやすい人」などはいくらでもおります。毎日のように報じられる犯罪など、どれをとっても割に合わない愚かなものばかりですし、「そこまでするか」というような理解不能の所業も珍しくありません。

ところが多くの場合、他人の所業を見る時はわかるのですが、自分が今現在関わっている問題の対応についてはなかなかわからないのです。例えばささいな言葉で他人からプライドが傷つけられると、立腹して過剰な反撃をしたり、関係ない人に八つ当たりしたり、いつまでも気に病んだりすることはよくありが

ちなことです。その時は自己愛みたいな偏執で心を支配されているのですが、自分を省みることでできない人はなかなかそれに気づかないのです。

「自分が」といっても、その自分について「何をもって自分とするか」「自分とは何か」という大前提が不明で統一されていないままでは、悪道を流転するばかりです。

ところが現代人ほど心や精神の問題に無自覚な時代はないのではないのでしょうか。自我意識が強くなって、自己主張や権利意識は盛んになってきましたが、その人間性においては自己矛盾や多重人格、自己喪失、自己迷惑など、精神医学上の病名を付けられなくとも、慢性的な心理反応が被害妄想となったり、無自覚な否定感情が自殺願望に転化したり、何らかの心の問題を抱えているようです。とりわけ宗教が劣化して、生きている限りつきまとう生老病死の苦に対する解決策を見いだせないでいるように思います。かつては無我とか無私という自省的な心もありました。

依正不二という観点からすると、依報（環境とか他人とか社会）と、自分をどこで線引きするかの問題が浮上します。自分の家族、会社、郷土、社会、国、あるいは人類全体と考えてみると、「彼あるが故に我あり」で、自分と他者は繋がっていると、境界の線引きができないものです。世の中が乱れてくれば、我われ自身も生活そのものが危うくなってくるし、自分の家族が一人大きな事件に巻き込まれたら、自分までそれに巻き込まれてしまうのですから自分の家庭、自分の国でも自分の領域、自分の一部であることになってくるのです。

「安国論」の中には、

「汝須く一身の安堵を思はば、先づ四表の静謐^{せいひつ}を祈るべきものか」(全集三二頁)

とありますが、要するに乗っている船が沈没してしまつたら、我われも沈没するのです。平穩に生活している社会制度でも今回、医療崩壊の危機に直面しました。これが深刻化すれば、市民の日常生活も危機に瀕してしまうのです。

人間関係もそうですが、自分の周りから不幸な人が出れば、自分もまた不幸にならざるを得ないのです。しかし、普段はそんなことはあんまり気がつかずに、他人事だと無関係と思つてしまつてゐるのです。

自分のことですら、例えば身体の一部が痛いそれが気になります、その時は他のことは忘れてゐるのです。指先を包丁で切つてしまつて痛むと、そればかりに気を取られて、他のものは見えなくなるのです。心臓・肝臓等は元氣な時はほとんど意識しません。若い時は自分の臓器の位置さえ正確にはわかりません。その臓器が故障してようやく意識するものです。

ところが意識しようとしまいと身体全体と心は密接なつながりを持つて、そのバランスで生命現象が行われているのです。意識しなくても血圧とか体温は一定のレベルですつと維持されていますから、普段は気にすることがないのですが、風邪でも引いて三十九度をくらの高熱を出すと、ようやく体温調節機能があることが分かるのです。

ともかく、その時によつて無氣力になったり、イイカッコしたり 妙に細かいことが気になったり、自己嫌惡に陥ったり、

不安定で一貫性もない煩惱を自己だと規定して、この煩惱を後生大事に奉つてゐるのです。

《マンダラ・チャート》

話は変わりますが、今メジャーリーグの大谷翔平選手の活躍が毎日のように報道されています。

この大谷翔平選手は、高校の頃に良い監督に出会つてメキメキ力をつけたのですが、その指導法の一つに「マンダラ・チャート」という目標達成シートの応用があつたのでした。

その方法は大きな紙に目標を書いて、目に付くところに張り出すわけです。その場合用紙をキュービツクのような縦横三×三枠の九つのマス目を作り、その中心に目標を書き込みます。例えば野球の一流選手をめざすのであれば「ドラフト第一位に指名される選手」というようにマス目の中心に書き込む。次に周囲八つのマス目には、それを実現するために必要なこと、今できること、やらなければならないことを、思いつくままに書き込むのです。

「ドラ1位」身体づくり・コントロール・キレ・スピード・変化球・運・人間性・メンタル」というようなものです。面白いのは、ここから更に続けていつて、周囲にさらにこの八つの実践目標を実現するための三×三枠のシートを作つてゐることです。例えば、「運」の目標シートでは「運」あいさつ・ゴミ拾い・部屋そうじ・審判さんへの態度・本を読む・応援される人間になる・プラス思考・道具を大切に使う」というものです。また「人間性」のシートには「人間性」感性・愛される人間・計画性・感謝・継続力・信頼される人間・礼儀・思いやり」

というものです。

もちろん半分以上は野球に直接関係する身体的、技術的な目標です。しかし半分近くは精神的なものの、「思いやり」とか「感謝」など、それと並んで生活態度の「道具を大切に使う」「部屋そうじ」「ゴミ拾い」などがあげられ、いかに野球がうまくても、不完全な人間がやっていることだし、全人格的な人間性の向上がなければ一流選手も育たないことをよく知っていたのです。松井秀樹選手や石川遼選手にも似たようなエピソードがありました。が、中学・高校の時から親や監督に、人間としての基本をしっかり教えられていたことが、後々に大成する要因となったようです。

私はこのマンダラ・チャートの記事を見て、次元は違いますが、何となく一念三千に通ずるものがあると感じました。

心と技や身体の問題、個々のテーマと全体との関係、生活全体が統一的で全人格的な目標設定などに、他の分野にも応用できる普遍性と哲学を有する訓練法であるように思えたからです。多くの場合、目標を立てて熱中しすぎると、回りのことが見えなくなってしまう。中心的な行動になりがちです。チャートというのは地図や俯瞰図などをいいますから、この場合自分の立ち位置や周囲との関係性にも気づきやすく、自分の進むべき方向、強化すべき課題、継続や感謝などのモチベーションにいたるまで自然に意

■ 大谷翔平が花巻東高校 1 年時に立てた目標達成表

体のケア	サブリント をのむ	FSQ 90kg	インスタブ 改善	体幹強化	軸を ぶらさない	角度を つける	上から ボールを たたく	リストの 強化
柔軟性	体づくり	RSQ 130kg	リリース ポイントの 安定	コントロール	不安を なくす	力まない	キレ	下半身 主導
スタミナ	可動域	食事 後7杯 朝3杯	下腿の 強化	体幹 間かない	メンタル コントロール をする	ボールを 弱で リリース	回転数 アップ	可動域
はっきり とした目標、 目的をもつ	一言一葉 しない	頭は冷静に 心は熱く	体づくり	コントロール	キレ	軸でまわる	下腿の強化	体重増加
ピンチに 強い	メンタル	素直に 流されない	メンタル	ドラ1 8球団	スピード 160km/h	体幹強化	スピード 160km/h	肩周りの 強化
波を つづらない	勝利への 執念	仲間を 思いやる心	人間性	運	変化球	可動域	ライナー キャッチ ボール	ピッチング を増やす
感性	愛される 人間	計画的	あいさつ	ゴミ拾い	部屋そうじ	カウント ボールを 増やす	フォーク 完成	スライダー のキレ
思いやり	人間性	感謝	道具を 大切に使う	運	審判さん への態度	遅く落差 のある カーブ	変化球	左打者への 決め球
礼儀	信頼 される人間	継続力	プラス思考	応援される 人間になる	本を読む	ストリートと 同じフォーム で投げる	ストライク からボールに 変げ コントロール	実行力を イメージ

(注) FSQ, RSQは筋トレ用のマシン (出所) スポーツニッポン

大谷選手のマンダラ・チャート

この御書にも、法華経に教門の難信難解と、観門の難信難解ということがあります。一つには二乗作仏といって、あらゆる人が成仏できる教法であること、……どんな人でもといっても付属池小事件の犯人のような極悪人でも成仏できるかは疑問だし、またそれまでの爾前経の教えでは絶対成仏できない一闡提とか二乗がいたのですが、法華経で誰でも成仏できるというのは、信

識化できるチャートとなっているようです。

《お題目の受持が末法の修行》

これについて考えてみると、我われも信心をしながら、目標の成仏ということがよく分らないところがあって、なんか他人事のように思っているふしがある。それでは成仏ということが信じられないし、またその目標に向かって修行しようという気も起きないと思います。

二つ目には草木成仏が説かれますが、これは人間のみなならず草や木も、また瓦礫石に到るまで、みな成仏できる一念三千の妙法の姿であるということが、観門の難信難解なのです。

この前もはやぶさ2が小惑星リュウグウから砂を採取して帰還しましたが、これを解析すると、生命や宇宙の成り立ちがわかると報道されていましたが、ミクロの世界の微量な有機物か

らマクロの宇宙が見えてくるといい、こうした構図は、まさに極大の三千諸法と極小の一念が相即しているという統一の宇宙像を示した一念三千観は不思議なほど宇宙物理学の到達点に似ております。

たとえば「観心本尊抄」に「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵、各一仏性・各一因果あり。縁了を具足す」という「金鉋論」の文を引かれて、一念三千は有情非情にわたり、一色三千、一塵三千でもあることを示しておられます。

一念三千といわれてもなかなか理解が及びませんが、我われのかすかな心の働きですら、宇宙全体と一体だという教えであって、そのことは法華経にはすでに二千数百年も前から説かれていたのですから驚きです。華嚴経の一即一切の教えよりさらに優れた一念三千は思想的にも哲学的にも最高峰の教えと言えると思います。

ともかく現代人の病弊というべき我慢偏執の病や、三毒強盛の傾向はいつも指摘するところですが、程度の低い自我観に由来するものです。この自我意識とは一時的な幻想であって、

その時しか通用しない仮のものです。人生について省みる時、そこに思議すべからざる因縁によって生かされてきたことに気づくならば、不可思議の妙法そのものの力用を認めざるを得ないのです。この時に妙法蓮華経を信じて帰命するならば自己も本来の妙法蓮華経の当体であり、一生成仏そのものの境地に達するので。そのために一生成仏のチャートとして観心本尊抄



ハヤブサ2とリュウグウ(想像図)

を表され、五字七字の御本尊を図顕され門弟に授与されます。大聖人は「観心本尊抄」の結論部分のところに、

「一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起こし、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたまふ。四大菩薩の此の人を守護したまはんこと、太公・周公の文王を摂扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり」(全集二五四頁)といわれて、我われは観心の法門である一念三千を、座禅を組んで瞑想修行したり、観心といって、自分の心を観察する方法では一念三千観に達するほどの機根はなく、そこで仏は大慈悲を起こして妙法蓮華経の五字のうちにこの珠を裹んで、我われの首にかけて頂いたというのです。したがってその修行法も分別功德品に説かれるように一念信解の受持行です。これを、

「其の中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初随喜と、此の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出づる門なり。」(四信五品抄)

と示されているように妙法蓮華経の修行は一念信解の受持であり。これこそ一念三千を成就する宝篋だととかれるのです。要するに一心に南無妙法蓮華経を信じて受持しお題目をすることが知らず知らずに九識心王に妙法蓮華経の宝塔が建てられることを意味しているのです。一念三千はそのまま妙法蓮華経であり、妙法蓮華経はそのまま一念三千です。但しその法体について、「治病大小権実違目」には、

「一念三千の観法に二あり。一には理、二には事なり。天台・伝教等の御時には理なり。今は事なり。観念すでに勝る故に、大難又色まる。」

と仰せで、天台の理観と宗祖の事行の違いを示されております。凡夫は志をもつて成仏するという受持信行を説かれているものです。

最後に、事一念三千を身に当てて受持した証果の文証をあげておきます。まず「観心本尊抄」には、

「妙樂承け釈して云く、当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、此の本理に称ひて一身一念法界に遍し文。」

を引いて、法界即日蓮の本仏境界を示し、「蒙古使御書」には、「所詮 万法は己心に収まりて一塵もかけず、九山八海も我が身に備はりて、日月衆星も己心にあり。」

と仰せられて蒙古襲来時期の予言適中のゆえんを明かされ、また「撰時抄」には、

「此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず。只偏に釈迦如来の御神（みたましい）我が身に入りかわらせ給ひけるにや。我が身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。」

と記して、宗祖が三度国を諫めてその都度一々に予言的中したことについて「日蓮が胸中に釈迦如来の御神が入りかわらせて諫言したもの」とし、一念三千法門とは此事であるとされました。

これは宗祖の己心所具の釈尊を指すものであり、この釈尊について「観心本尊抄」では、

「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の

古仏なり。」

として事の一念三千の曼荼羅本尊に図顕された南無妙法蓮華經の脇士の釈尊であります。この御本尊に向かうことは、十界の命が全部妙法蓮華經のお題目の光明に照らされて、本有のあるがままの姿で成仏している姿を、十界互具の御本尊は示しているのです。

しかもそれが日蓮大聖人の己心中において実証されたことを、御本尊が示しているのです。大聖人を動かしたものは、この法華經のお題目の力なのです。我われもまた大聖人を師匠として、お題目をもつて切り開いて行こうとすれば、日蓮大聖人と同じような、明らかな智慧と大きな力をいただくことができるのです。とかくすると、金力とか権力に頼りがちですが、本当は自分の今の瞬間の命の中に、無限のエネルギーが繋がっていることを、日蓮大聖人がお示しになっていると思うのです。

我われは、今の時代の中で社会的な規制を受けて、人間も管理されて養鶏場の鶏のように人間も管理されて、小さくまとまってさつさと人生を諦めてしまうような生き方が多くなっているようですが、本当はたとえ高齢になろうと病気であろうと、いかに貧しかろうと、このお題目をしつかりと持って、一念三千を深く心に留めるならば、必ず大きな力、生きる勇氣、希望をそこからいただくことができると思うのです。

どうか、どういう場合でもこの御本尊に向かってお題目を唱えることによって、さらなる自分自身の成長に結びつけていただきたいと思います。

南無妙法蓮華經

（了）

【御書と日興上人（一七二）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一〇六）

松田 銘道

前回は、『法華取要抄』の最後の問答で、国土の乱れⅡ二つの太陽と二つの明星の出現は、「上行等の聖人」が出現し、妙法五字を広宣流布する予兆と門下に示されたことについてみてきました。引き続き、「国土の乱れ」と「上行等の聖人」の出現についてみていきます。

『法華取要抄』の述作から半年後、文永十一年十月五日に蒙古軍が襲来します。その情報をいち早く伝えているのが文永十一年十一月十一日の『上野殿御返事』です。そこには襲来が現実化したことについて、

「抑日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども、日本国の上下万人一同に、国のほろぶべきゆへにや用ゐられざる上、度々あだをなさるれば力をよばず、山林にまじはり候ひぬ。大蒙古国より

よせて候と申せば、申せし事を御用ゐあらば、いかになんどあはれなり。」

と指摘されています。ここには、『立正安国論』以来の、国の存亡という危機を救うため、度々、幕府に諫言したことを用いていたならば状況は違つてきた、との想いが綴られています。また、翌、文永十二年三月の『曾谷入道殿許御書』には、

「今末法に入りて二百二十余年、『於我法中 闢諍言訟 白法隱没』の時に相当たれり。法華経の第七薬王品に教主釈尊、多宝仏と共に宿王華菩薩に語りて云く、『我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便りを得しむること無けん』。大集経の文を以て之れを案ずるに、前

四箇度の五百年は仏の記文の如く既に符合せしめ了んぬ。第五の五百歳の一、事、豈に唐捐とうえんならん。随つて当世の爲体、大日本国と大蒙古国と闢諍合戦す。第五の五百に相当たれるか。彼の大集経の文を以て此の法華経の文を推するに、『後五百歳中 広宣流布 於閻浮提』の鳳詔、豈に扶桑国に非ずや。」

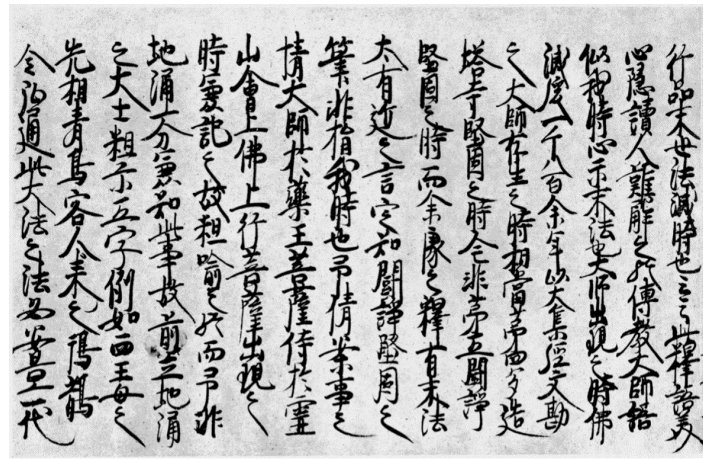
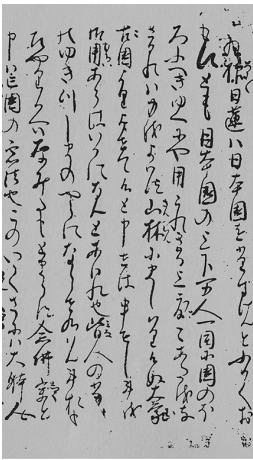
とあります。ここでは、

・『法華経』薬王品に「広宣流布」する「後の五百歳」とは、『大集経』にて、釈尊入滅後、一時期五百年として五つに分けた最後の「闢諍堅固」のこと。

・蒙古軍との「闢諍合戦」は、『大集経』の「第五の五百」Ⅱ闢諍堅固の予証の実現。

ということが示され、「薬王品」の予証は、末法の時代に蒙古軍との合戦Ⅱ闢諍堅固が生じている日本に「法華経」が広宣流布することを示している、との見解が示されています。そして、その弘教を任された上行菩薩の出現については、

「根本大師の記に云く『代を語れば則ち像の終り末の初め、地を尋ねれば唐の東、羯の西、人を原もとぬれば則ち五濁



の生闘諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉況滅度後と、此の言良に以有るが故に』云云。(中略) 大集經の文を以て之れを勘ふるに、大師存生の時は第

四の多造塔寺堅固の時に相当たる。全く第五闘諍堅固の時に非ず。而るに余処の釈に『末法太有近』の言は有り。定めて知んぬ、闘諍堅固の筆は我が時を指すに非ざることを。予、

右：『曾谷入道殿許御書』（真蹟・中山法華經寺蔵）。国土が乱れる末法には、上行菩薩が出現し、三大秘法を建立することが示されている。このことから、宗祖と上行菩薩の関連について、「三大秘法」の説示が注視できる。

左：『上野殿御返事』（日興写本、大石寺蔵）。蒙古襲来の翌月の書状。『立正安国論』での他国侵逼難の予証が的中したことを、諫言を用いていた状況は違っていた、との想いが綴られている。

・ 伝教大師の當時は、「大集經」の「第四の五百歳（＝多造塔寺堅固）」に当たっている。
・ しかし、『法華秀句』に「五濁の生闘諍」＝末法の様相について言及しているのは、伝教大師の本地の薬王菩薩が「靈山会上」にて法華經の説法に列なり、「上行菩薩」の「出

現」について聞いて聞いたことから、大師がその後身として前もって「粗」示した。
・ 地涌の菩薩としての役割の一分でも担う者ではないが、「兼ねて此の事を知」っているのが、「地涌の大地（＝上行菩薩）」の出現に先馳けて妙法「五字」を説き示している。
との見解を示されていますが、上行菩薩が出現する末法の時代と宗祖御自身の役割について、「兼ねて此の事を知る」と仰せになっていることについては、『法華取要抄』の末文との関連が注目できます。そこには、
「是の如く国土乱れて後、上行等の聖人出現し、本門の三つの法門之れを建立し、一四天四海一同に妙法蓮華經の広宣流布疑ひ無き者か。」
と、大難が種々現れて国土が乱れた時、上行菩薩等の聖人が出現し、本門の三大秘法を建立し、妙法蓮華經の五字を広宣流布するとの見解が示されています。このことから、宗祖の上行菩薩との自覚について、「本門三つの法門」の説示との関連が注視できます。

興風談所の研究成果(九)

興風談所 菅原閑道

『興風』十七号

『興風』十七号は平成十七年十二月十三日刊で、菅野憲道「武田氏の駿河侵攻と富士門徒―戦国期における富士門徒の動向Ⅲ―」、菅原閑道「弘安初頭における日蓮門弟と天台僧の論争」、坂井法暉「伯耆殿并諸人御中御書の原形について」、池田令道「竹取物語と富士戒壇の縁由―千葉妙本寺蔵『当家聞書』を読んで―」、池田令道「天目・日向の方便品説不説論争について」、大黒喜道「檀那門跡相承資并恵心流相承次第」の什覚記録について、山上弘道「日蓮大聖人曼荼羅本尊の相貌変化と法義的意義について」、付録Ⅰ『『当家聞書』竹取物語(原文二七丁く三一丁)千葉妙本寺蔵」、付録Ⅱ「本迹事 日進著・日乾筆 立正大学情報メディアセンター蔵」という内容である。

菅野は武田軍の侵攻時における富士五山諸寺の動向を考察する。甲斐の武田、相模の北条、駿河の今川による三国同盟が破綻した永禄十一年(一五六八)以降、武田信玄はたびたび駿河に侵攻して今川や北条と攻防を重ね、三河の徳川家康も遠江へ侵

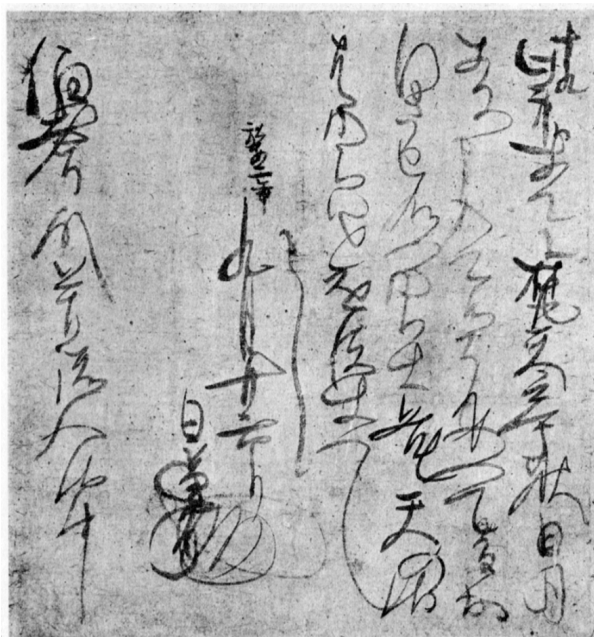
攻した。その後徳川は北条と手を結び、今川氏真を懐柔して遠江を得、駿河の実質的支配権は氏真夫人の実家北条に移る。しかし武田は執拗に侵攻を繰り返し、永禄十三年には今川・北条の城を次々に制圧し、東部を残して駿河の大半を手中にする。

そして元亀二年(一五七二)末に北条氏政と甲相一和と呼ばれる同盟を復活させ、駿河のほぼ全域を手に入れ、支配は武田勝頼が一族もろとも滅ぶ天正十年(一五八二)まで続く。話は遡るが、第一次駿府攻めが行われた永禄十一年十二月、信玄は今川氏真を駿府城から懸川城(掛川市)に敗走させて駿府を占領したものの、今川の援軍北条が薩埵山まで軍を進めたことで、興津川を挟んで両軍がにらみ合う形となった。しかも甲斐との往還路である富士口が、富士大宮城(富士宮市)に籠城した富士氏によって断たれ、武田軍は駿府―興津間に閉じ込められてしまう。さらに徳川と今川が和睦交渉を進めたことでいつそう窮地に追い込まれた信玄は、甲府への帰路を確保するため、永禄十二年二月初め、富士口に穴山・葛山千騎を差し向け、富士地方一帯が戦場化した。北山本門寺と大石寺が焼失したのは二月四日と七日で、菅野は翌三月に北山本門寺の有力檀越である井出直らが穴山・葛山隊と戦った文書を示して、「両寺とも敵属の寺家として焼き討ちされたものであることが浮かび上がってくる」と指摘する。北山本門寺・小泉久遠寺・大石寺等の寺家衆は戦火を避けて本尊聖教類や宗祖御影像を避難させたが、同時代の先師の遺物や文書類の多くが烏有に帰した。しかし西山本門寺・妙蓮寺・小泉久遠寺は武田一族や里見義堯との縁故もあって比較的被害が少なかった。考察は信玄と日蓮宗の関係、小泉久

遠寺・北山本門寺・大石寺の再興等に及ぶ。秀逸な論文である。菅原は弘安一、二年における①賀嶋莊実相寺の豊前房と尾張阿闍梨②蒲原莊四十九院の日興上人と嚴誓③下総の富木常忍と了性房思念房④下方莊滝泉寺の日秀日弁と行智の四つの論争について論ずる。①②④は熱原法難を誘発するものである。

了法寺所蔵の断簡「伯耆殿并諸人御中御書」一紙(真蹟集成

五卷一二三頁)は日興上人等に宛てられた弘安二年九月二十六日状の末紙で、内容は熱原法難に関するものである。これを実地調査して得た知見をもとに、坂井は頂妙寺所蔵の「断簡一五八」一紙(同五卷一一七頁)と国土安穩寺所蔵の「断簡追加」三行(昭定四卷二九四二頁末)の筆蹟・内容が類似することを突き止めて同一文書とした。後の平成二十年には都守基一氏が師子吼会所蔵の四行断簡も本書の一部であると推定した。こうして「伯耆殿并諸人御中御書」全十九紙の一部が復元された訳である。詳しくは『統合システム』中の「日蓮遺文御書システム」番号一四三八「伯耆殿並諸人御中御書」を見て欲しい。



了法寺所蔵の「伯耆殿並諸人御中御書」末紙

捨てて中山門流に帰依↓『本迹事』『法華問答正義抄』が述作される、という宗史の流れを明らかにする。

天台宗の逢善寺所蔵『檀那門跡相承資并恵心流相承次第』は前半は筆者不明、後半は同寺十五世学頭定珍(二五三四〜一六〇三)の筆蹟である。本書は関東天台の学匠什覚(一三一九〜一八〇一)が書いた什覚記録を収録するが、大黒は従来の翻刻の誤読を正し、さらに従来説よりも什覚記録の範囲が広いことを指摘し、他史料とも照合してその資料価値の高さを論証する。

を論証する。

山上は宗祖曼荼羅の相貌変化を考察し、『報恩抄』と『本尊問答抄』の本尊観の相違に着目して、弘安期の曼荼羅の主体は中央の題目とその下に大書される「日蓮(花押)」にあるとする。

『興風叢書』〔9〕

池田の「竹取物語と富士戒壇の縁由」は千葉妙本寺所蔵の『当家聞書』によって、竹取物語と富士戒壇の縁由や、日興門流が富士山をどのように捉えてきたかを読み解く。「天目・日向の方便品読不読論争について」では、中山門流日全(一二九四

〜一三四四)の『法華問答正義抄』や身延久遠寺三世日進の『本迹事』が伝える天目と日向の方便品読不読論争について考察して、正安三年(一二三〇)天目が方便品不読を主張↓翌年日向と問答↓徳治三年(一二三〇)天目死去↓応長元年(一二三二)天目の本迹勝劣義に同調した日弁死去↓正和三年(一二三四)日向死去↓暦応二年(一二三九)以前に日弁の弟子日忍が本迹勝劣義を

『興風叢書』(9)「宮崎県の題目板碑」は興風談所と他の二三のメンバーによって平成十二年八月、同十七年九月の二回にわたり実施された宮城県題目板碑の調査記録で、平成十七年十二月十三日刊である。資料編には中田町の石仏堂・本源寺・本源寺跡・五十嵐家・新井田城本丸跡・及川家、迫町の上行寺・柏木経塚、一迫町の妙教寺、河北町の屋木沢法華堂・倉迫古碑群・倉迫鈴木家神祠前・北境法華堂・北境日野家、大衡村の大福寺跡、金成町の秋葉神社、若柳町の薬師堂、志津川町八幡神社にある題目板碑八八基の翻刻文や拓影等を掲げる。坂井法暉の解説「日蓮門下の奥州布教と題目板碑について」によれば、奥州に初めて宗祖の教説を弘めたのは日目上人(一二六〇～一三三三)で、祖父は奥州の御家人新田太郎重房である。上人は宗祖滅後しばしば奥州に下向したようで、上新田坊(後の本源寺)の弘安六年開創が伝えられる。日興日目両上人が奥州の僧俗へ授与した本尊は現存するだけでも四十幅近くが確認され、多数の法華衆徒が創出されていた。ただし応安六年(一二七三)以前に中山門流も奥州へ進出しているため、右の板碑群の造立がいずれの門流によるものか検討の余地がある。そこで坂井は一例として、河北町屋木沢法華堂の題目板碑と日目上人の守り本尊の題目を図版で対照し、両者が酷似することから上人の筆法を模したものと推断する。私見を加えれば、嘉暦二年(一二三二)造立の河北町北境法華堂No.9の巨大な題目板碑は日興上人の題目を模しているのではないか。ただ嘉暦当時の題目ではなく、乾元二年(一二〇三)か嘉元二年(一二〇四)頃のもののように思える。あれこれ勘案して、これらの板碑群は坂井の指摘

どおり、日興門流の僧俗の造立と考えて間違いあるまい。

『興風』十八号「興風談所設立二十五周年記念特集号」

『興風』十八号は平成十八年十二月一日刊で、川添昭二「蒙古襲来研究と日蓮遺文」、都守基一「永祿の規約をめぐる中世日蓮教団の動向」、池田令道「『法華問答正義抄』の日蓮遺文をめぐる」、坂井法暉「金沢北条氏に関する日蓮の記録」、菅原関道「北山本門寺文書『実相寺衆徒等愁状写』考」、大黒喜道「日蓮聖人の成仏義諸型とその受容」、山上弘道「宗祖書状・陳状等のご自身によるテキスト化について」「頼基陳状」「本尊問答抄」を中心として――【付録】『頼基陳状』日澄本・日興本の翻刻および対照」、大谷吾道「日睿筆『類集記』について【付録】日睿筆『類集記』翻刻」という内容である。

この年興風談所は設立二十五周年の佳節を迎えた。六月の記念研修会では特別講義として九州大学名誉教授川添昭二氏の懇切な講義を頂戴し、それを本誌巻頭に収録した。また招待した都守基一氏にも研究発表して頂いた。

川添氏は永年の研究テーマである蒙古襲来研究と宗祖遺文について講義し、締め括りに十四項目の問題点を提示されたが、次の指摘は大変興味深い。「蒙古来牒の翌年以後、日蓮が蒙古襲来の宗教的意味を説く場合には、右のような天譴的表現を用いています。そしてその対象は信徒です。この「日秀・日弁等陳状案」は、つまるところは北条氏の得宗権力を相手とするいわば公式の文章です。こんなことを合わせ考えると、日蓮の蒙古襲来に対する表現は、権力に対する公的な場合と信徒に対する

場合とでは、おのずと異なっていたのではないか、という推測さえ出てきます。日興をはじめ、日蓮の門下が、蒙古問題を通して権力に向かう場合、日蓮のこの「公的」な表現を継承しているのも、この辺に理由があるように思えます」

都守氏は永禄七年（一五六四）八月に京都日蓮宗十五本山が誓約した、いわゆる「永禄の規約」について、従来の研究では自主性のない消極的な取り決めとして評価が低いが、これは事態の全体像が見えていなかったために生じた誤解であるとして、その意義を再検討する。この規約は本迹一致・勝劣の論争による内訌を憂えた諸門流の代表者たちが、南無妙法蓮華經の題目のもとに一味同心し、自讃毀他の争論や、弟子・檀那の取り合いをしないことを申し合わせたものであり、関東の本土寺と日什門流により提案され、京都本国寺や妙覚寺、堺の薬草院が奔走して遂行し、本能寺等の勝劣派側からも積極的な関与があつて成立した大規模な和融運動であるとする。

池田は等覚院日全（一二九四～一三四四）の著『法華問答正義抄』に引かれる宗祖遺文三十八通の一覧表を作成し、殆どが日常『常修院本尊聖教事』日祐『本尊聖教録』に収録する遺文であり、次に身延曾存遺文が多いことを明かす。「四条金吾宛御経送状」「真言秘法由事御書」「本門戒体抄」を個別に検討し、「本門戒体抄」が宗祖滅後三十年頃に偽撰書として成立したことは真偽問題の考察において大きな判断材料となるとする。

坂井は昭和十二年に山川智應氏の発見した断簡（A文書）の内容や執筆年を再検して、本書の後半部分に当たる断簡（B文書）の存在を突き止める。B文書はその内容と宗祖花押の形から文

永十年なのは確実で、A Bを繋げて復元された当遺文が、文永十年十一月三日に佐渡から富木常忍へ送られた書状と判明した。これによって坂井はA文書の流罪事件の当事者を金沢実時の庶長子の実村と実村の母と比定し、その原因も推測する。当遺文は「日蓮遺文御書システム」番号一―一三一を見て欲しい。

菅原は北山本門寺所蔵の日興筆『実相寺衆徒等愁状写』は幕府得宗家への訴状であつたと考え、全五十一條の内、十九條までを院主の非法、二十條以降を院主代の非法とみて考察する。本書に関する堀日亨師・高木豊氏等の研究も紹介する。

大黒は宗祖遺文に示される代表的な成仏義として、①本覚及び基体説に基づく成仏義②十界互具・一念三千に基づく成仏義③相對種開會・変毒為薬に基づく成仏義④転重軽受と靈山往詣に基づく三世の成仏義を提示し、宗祖の信仰生活を支えた④がどのように日興門流等で受容され欠落していったかを述べる。

山上は『頼基陳状』『本尊問答抄』を中心に宗祖が自書を門下のテキスト（教材）としたことについて述べる。『頼基陳状』のそれは『興風』十五号の菅原論文を土台にして自説を展開する。付録の『頼基陳状』日澄本・日興本の翻刻は利便性が高い。

大谷は日郷の弟子薩摩日睿（一二〇九～一六九）の自筆文書『類集記』（千葉妙本寺所蔵）を翻刻して、①日睿事績②本書書誌③本書概要④関連書物⑤日郷からの相伝記録⑥三法妙を中心とした相伝法門の形態について述べ、日睿略年譜を付す。これまで本書は『富士宗学要集』にわずかに抄録されただけで、『研究教学書』『日蓮宗宗学全書』には収録されておらず、日興門流上代の教学や動向を知る上でも更なる研究が期待される。

【採過拾新録】

高山樗牛

「予の好める人物」

——日蓮上人——

『高山樗牛と日蓮上人』（大正二年六月刊）より

日蓮上人

日蓮上人のことは、この正月の本誌「少年世界」に、鎌倉のはなしを述べた折りにも一言したことがあるが、その人物においても事業においても、鎌倉時代はおろか、日本の全歴史を通じて、上に匹敵し得べき人は幾人も無かるう、否、全く無いかも知れぬ。少年諸君よ、この世の中で真に偉大なる事業というのは、何も人を殺したり、国を取ったりするこのみでは無い。少年の心にも、兎角頼

朝や太閤の様に天下を取ったり、外国を征伐したりするのが、真に英雄の事業の如くに思われ、文芸や宗教の上の成功などは、左程に貴むに足らぬことの様に思われるであろうが、これは大いなる誤りである。人を殺し、城を屠ることも難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後生までもその勢力を有することは、人間の事業としては更に大きく、また更に尊むべきことではあるまいか。諸君よ、アレキサンドル大帝の遺業もローマ帝国の覇権も、その時々栄落に過ぎずして、

今日においては何の跡かたも無いが、アリストートルの学術やキリストの教えは、今日もなお昔の如く人の心を支配し感化して居る。春秋戦国の王覇の争いも、支那の歴史に空しき文字を留めたばかりであるが、その当時に陳蔡の野に飢えた孔子の教えは今もなお東洋文明の根柢となつて居る。世にいわゆる英雄豪傑の事業は壮快は壮快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしむる外に、多く後世に影響を与えるものではない。これを喩えるならば、丁度仕掛け花火の一時人目を眩まして、覚えず快哉を叫ばしむるが、間もなく消え去つて元の暗黒に立ちかえる様なものだ。これを文芸や宗教の勢力の深大にして且つ永久なるに較ぶれば、事業の価値何れか大なりやは、おのずから明らかであらうと思う。されば英国の哲人カーライルという人は、英吉利が一人のシェキスピアを有することは、^{インド}印度帝国を有するよりも貴いと言った。



また人物の上から見ても、真に大なる人物とは、その理想高尚にして品性貴く、且つ意力情操の絶大純潔なる人をいうのである。世のいわゆる英雄豪傑と呼ばれる人の中には、その表面の仕事こそ人並み以上に大きい、その品性の之に伴って高潔なるは極めて乏しい。つまり彼等の多くは境遇の幸いなりしがために、己れ真に之に当たるべき才器品性なくして、偶然に大事を成し遂げた者が多い。例えば、高山の上に吹き上げられた種子がその処に生長して、亭々として天際に聳える様なものだ。もし揮一貫の赤裸にして突き出したならば、東家西家の権兵衛八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くはいわゆる時勢の寵児であるからである。

日蓮上人はその人物においてもその事業においても、真に偉大と称せらるべき

人であつた。先ずその事蹟から考えて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼より出家して清澄に上り、後叡山に学び、十二年の遊学の後、当時に行われたる仏教諸宗門の、何れも教祖なる釈迦の仏意に違えるものなることを悟り、その故山



高山樗牛

つあるこの大覇府の大道に立つて、念仏者は無間地獄に墮つべし、禅は天魔の業ぞと大呼せしかば、執権北条氏の怒にふれて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、その間、あるいは暴民のために庵室を焼かれ、あるいは竜の口に引かれて首切られんとし、あるいは

に帰り、初めて法華の新宗門を開きしが、聞くもの皆狂として取り合わず。却つて在来の宗門を罵詈雑言を怒りて、彼れを殺さんとせし者すらあつた。日蓮遁れて鎌倉に至り、浄土や禅宗の全盛を極めつ

らず、三五年乃至十年ならず、実に二十年の長い間であつた。彼れはこの長い長い二十二年の間、絶えず自己の信じた真理を飽くまで宣伝し、生死の間に出入して泰然として動かなかつた。常に、

敵人に要撃せられて、命を落さんとし、その他刀杖瓦石の災難、その数を知らず。前後凡そ二十二年の間、席暖まるに違なく、生傷の身に絶える間はほとんど無かつたとのことである。諸君よ、日蓮の受けた迫害は、実に惨酷極まつたものであつた。そしてその時間も一年ならず、二年な

この臭き身を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代え、糞を米に替えるなりといい、たとえ日本国の位をもつて誘うも、父母の頸を切らんと脅かすとも、我は決してこの真理をば捨てじ。その外の大難風の前の塵たるべしと宣言して、天下何の恐るる所なく憚るところなく、声の根の枯れざるかぎり、筆の毛の続かんかぎり、正々堂々と天下に呼号した。法然や親鸞の様に朝家権門に知己あるではなく、天上天下介然孤立の身をもつて満天下の僧俗を敵として折伏しやくぶくの法鼓を鳴らし、時の執權たる北条氏を逆賊と呼はり、僅わずかかの小島こじまの主と卑しめ、七大寺の寺塔をば焼き払いて、彼等の頭を由井が浜にて斬らずば、日本国必ず亡ぶべしと極言して、一世の耳目を警醒せしその態度の雄々しき、男らしさは、実に我邦の前後の歴史に類似の無い事であつた。

諸君よ、古人の語に一義を執つて十年を踰えるものは必ず真面目なり、という

ことがある。日蓮は二十二年の長い長い月日の間、常に生死の間に出入しながら、その真理と信奉せる法華經を説いた。これ程の真面目がまたと世にあるであらうか。されば天も人も、次第にこの至誠の声になびきて、その教えは漸く都邑に拡がり、俗人の帰依するものは言うまでも無く、浄土、禅宗等の僧侶共も追々と改宗して、念仏の代わりに唱題の響きがだんだん高くなつた。北条より足利の時代になつてからは、この宗門の勢はますます盛大となり、戦国時代にありては、天下の寺院の中にて法華その半ばを占めたとのこと。後年に至つて色々の事情から追々衰微して、今日では真宗の全盛に压倒されて了つたが、それでも堂々としてなお日本国の大宗門たるを失わぬ。これみな日蓮上人の遺業の余沢である。

それで日蓮の人物は如何であるかという、決して世人の多くが信ずる様な強情我慢一方の人では無い。「七大寺の寺

塔をば焼き払いて彼等の頸を由井が浜にて斬らずば日本国必ず亡ぶべし」などと痛言せられたあたりは、実に辛辣激越の極みではあるが、その裏面に温潤玉の如き愛情が春の泉の様に溢れておつたことは、『御書』を読んだ人、読んで解し得た人の必ず認むる所であらう。女性に対しては常に親切を極められ、夫婦の愛情に対しても常に深厚なる同情を寄せられて、孝順の情に至つては実に後人を感じするに足る美蹟を遺された。即ち六十近き老境に到りながら、なお父母を懷慕するの情に堪えず、身延の山に引籠もつてからも、毎日五十余丁もある陰山を攀じのぼりて、遙かに生国房州の空を拝まれたとのことは、実に孝行の鑑というべきではないか。これが一日二日、一月二年のことではない、雨の日も雪の日も、九年の長い間、一日も欠かさなかつたというに至つては、真に驚嘆の外は無いではないか。そういう慈悲愛情の話が、上人

の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、単に強情我慢の一狂僧と思うのは、まったく上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。されば史伝の中にも、一度上人を拝したばかりで、その慈光に射られてそのまま帰依したということは度々出て居る。これを要するに、上人は知識においては、当時の如何なる碩学にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、またその意力においては、生死を顧みずしてその信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、またその感情においては、温潤閑雅、いわゆる大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の、人情をもたれたのである。

上人の教学、上人の信念、乃至所志は如何。この問題は今ここに述ぶるには不適當であるから、すべて略す。所詮か

る偉人を雑誌の一小文で、読者に解らせようとするは、初めから無理なことである。



日興上人（右）と日持師

るから、我輩はただ上人に就いて見る所の十の一を記し、少年諸君が後日の研究の助けにしようと思うのである。

（附）日興、日持が事

日蓮上人の事をお話した序に、我輩はぜひ諸君にその二人の弟子の事に就いて話したい。坊さんの事ばかりで煩^{うるさ}いであろうが、しばらく辛抱して聞いて下さい。日蓮上人に六人の高弟があつて、通例六老僧と呼ばれている。日興と日持は、この六老僧中の二人であるのだ。

東海道の鈴川の停車場（※吉原駅）から五里あまり、大宮からは三里もあらうか、富士の裾に大石寺という寺がある。この寺は余程の大伽藍で、日蓮宗富士派と称する一派の本山で、その開祖が即ちここにいう日興上人である。

この寺を日興が起てた因縁が甚だ壮快だ。元来法華經というお経には、迹門と本門とがあつて、前者は学校でいうならば予科、後者は本科の様なものだ。日蓮宗の人に言わせると、この本科は日蓮上人が始めて開いたので、その以前には予

科、即ち迹門ばかりであったのだ。そこで日興上人の考えたには、昔伝教大師は法華迹門の戒壇を起すためにすら、比叡山に三千房を建てた。今我が祖師日蓮の開かれた本門の戒壇を建てるには、^{すべからず}須らく一万坊を造るべしと。そこで土地を日本一の富士山に卜して、一万坊を建築する縄張りまでした。その跡が今でも万坊が原といって、名前だけではあるが、日興上人の大計画を後代に語るべく残って居る。今の太い大石寺は、日興の当初の考では書院位のつもりで、本堂は別に大々的なものを造るはずであったとのこと。このことは別に何でもない話の様ではあるが、日蓮上人の教理の広大なる一つの感化として見ると、頗る面白いのである。それから次は日持上人の事であるが、この人の事蹟は日蓮主義の発表としては更に痛快だ。元来日蓮の理想は、その妙経の真理をもって先ず日本国を帰依せしめ、それから十方世界に及ぼして、全天

下を統一するのであった。日蓮の死んだ後に、日持上人はこの大目的を継ぎ、日本国内のことは他の諸老僧あれば事足りなん、予はこれより国外に布教して祖師上人の遺志を継ぐべしと唱え、弟子従僕等は危難に勝えざるべしとて一切謝し去り、己れ一人にて今の北海道に渡り、それから北方アジア大陸に渡って遂にその行方を失ったとのことである。近來ある探検家の話にはウラジオの付近で、六百年前に日本僧の虐殺せられた遺跡を発見したそうだが、あるいはこれが日持の最後ではあるまいかと想像されるが、何分確かなことが明らかでない。

諸君、昔から海外から僧侶が来て我邦に布教した例は非常に多いが、我邦から海外異教の蛮族に布教に出かけた人は、日持の外に誰があるであろうか。死はも

とより覚悟の前である、ただその蛮族に妙経の福音を伝え、一人でも二人でも真理の光に救いたいというその大慈悲心は、実に広大無辺といわなければなるまい。

諸君よ、我邦に六宗十宗と宗旨の数は非常に多いが、日持の如く海外布教のために死したる高僧を出したる宗旨は、日蓮宗を除いて何処にあるか。日蓮上人の宗教的理想の広大なることは、その一つの感化たる日持上人の行動を見ても、よく解ることと思う。(三十五年八月—十一月。第三卷五一九—五二八)



『少年世界』の創刊号

本書は、「小説新潮」に昨年六月から連載された小説「パッション」を改題し、宗祖日蓮聖人の御生誕八百年の二月十六日に発行していることから、記念すべき日に向けて準備していたのかも知れない。著者は、多くの歴史小説を手掛け、一九九九年の『王妃の離婚』では第二百二十一回直木賞を受賞している。

「パッション」とは熱情。その原題にふさわしい筆力で、当時の政治、社会状況を土台に、天変地異や疫病に苦しむ人々を救おうと、一切経にその原因を求めた宗祖が法華経の行者として生きた姿を、御書に基づいて見事に再現している。

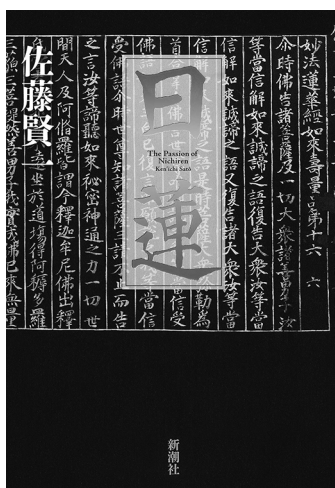
しかも、御書の活用の仕方にも著者の独自の発想が随所に取り入れてあり、読む人の心を鎌倉時代へと誘う、そんな臨場感が伝わってくる力作。

たとえば、宗祖は執権・北条時頼と一度だけ会っていることが御書か推測できるが、そのことが『立正安国論』の主客の十問九答の構成に用いてある。

宗祖の噂を耳にした時頼が身分を隠して草庵を尋ねる。そこで、今現前に生じている天変地異がなぜ頻繁に発生し、多

読書案内

松田 銘道



佐藤賢一 著

『日蓮』

新潮社
新 定価 一九八〇円

くの人々が塗炭の苦しみに遭遇しなければならぬのか。その原因は何か。また、救済する手立てはあるのか。宗祖との問答が『立正安国論』の内容に沿って力強く展開されている。

その問答そのものが、現代社会に通じてくる。いや、むしろ今は人災によって災難を増幅させてきているのかも知れない。科学の力で自然災害のメカニズムを解明しても、人の心はコントロールできない。そのことを、世界規模で拡大している疫病から多くの人が感じはじめている。それだけに『立正安国論』の問答が実際に行われたという構成が生きている。

その他、法華経のご文が法難を乗り越える場面に用いてあるが、その経文も、宗祖が語る場面に用いてあり、わかりやすく、しかも説得力のある言葉として私たちの心に響いてくる。御書の用い方もまた同じく、宗祖が語る言葉として用いてあり、小説とは思えないほど、その語りは生き生きとしている。こうした手法は、著者が御書を読みこなして宗祖を描こうしたことにあると思われる。

御生誕八百年にふさわしい作品。

【寄稿】

地球温暖化をくい止める方法

豊能地区 宮崎和子



宮崎和子さん

世界で温暖化が急速に進む、大変な時代に突入しました。原因は、ジャングルを切り開き、木はどんどん伐採され、北アフリカは大都市になりビル群が出現し、工場が建設され、人々が快適な生活を樂しみ、本能の趣くままに生きて来たことによります。

その結果、温暖化を引き起こし、山火事が発生し、地球全体を熱くしてしまつたのです。このまま何もせずに放つておくと、地球は十年もたないような予感がします。

この地球温暖化問題は、二酸化炭素だけの問題ではないのです。命ある木を伐り倒す、この行為が人間に跳ね返っているのです。

これを食い止めるには植林をすること

日蓮大聖人様は、「草木成仏口決」の中で、草や木にも生命が存在し、仏になると説かれています。
私もいろいろな方から話を聞くのですが、この草木成仏が本当に存在し、しかも人類とも切り離せない深い関係があるという真実を、多くの人が知ったならば、植林が進み、世界の温暖化が止まるのではないかと考えます。

が急務です。そのために信心をしている我われは、まずは地域の自然を守る会等の植林活動に参加してはどうでしょうか。お題目を唱えている我われが先頭で立ち上がって、植林をして地球を冷やそうではありませんか。



世界各地の森林破壊は深刻さを増している

恵日だより

案内 お知らせ

*各種行事について

七月度の諸行事中、役員会と法華経講義は中止します。その他は『恵日』の行事予定表の通り行います。密集・密接を避けるため、座席数を制限しますので、参詣の方はお寺までお知らせください。参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒等、感染予防に努めて下さい。※源立寺の玄関・トイレ等にアルコール消毒液が置いてありますので、参詣の際はご利用下さい。

*お盆棚経のご案内

例年のお盆の棚経につきましては、現在実施するか検討中です。追って、実施する場合は、七月末に予定表を郵送し、お参りする日をお知らせします。中止の場合も、その旨郵送にて

お知らせします。

なお、実施する場合は、八月八日（日）～十二日（木）に、各家庭にお参ります。

*お盆お塔婆のご案内

※お盆のお塔婆の申込み受け付けを、開始しています。なるべく早めに申込みをお願いします。

【文月詠草】

友の計を 問ひきし姉に 伝えたる

〔和風〕

受話器持つ手の 震え止まらず

朝日さし 霜解け水の 首すじに

ひとしづく落つ 小屋の入口

【恵日俳壇】

滝道の茶屋にぼつり夏帽子

〔農婦〕

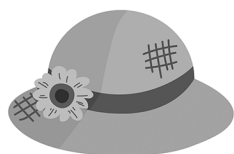
半夏生雨には雨の農仕事

梅雨晴れやすれ違ふ顔笑み浮かぶ

〔森 秀之〕

暗闇の灯りをたよりに登山口

熊除けの鈴の音信じ登山道





七月の行事



一日（木） 午後二時 お経日

四日（日） 午前九時 講中勤行会・幹事会

十一日（日） 午後一時 お講・役員会

十三日（火） 午後一時 お講

◆感染防止にご協力を

新型コロナウイルス感染拡大防止の緊急事態宣言は終了しましたが、引き続き「まん延防止等重点措置」が継続され警戒が必要です。源立寺における諸行事も、座席数の制限等に対応しておりますので、法華講の皆様には、ご協力の程、よろしくお願いいたします。くれぐれも感染予防に留意してお過ごし下さい。

源立寺

※八月号の継命・恵日発送（七月末）は、

『大阪』地区が担当です。

九月号の継命・恵日発送（八月末）は、

『北摂』地区が担当です。

恵日

令和三年七月号 通巻三二八号
令和三年七月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇〇 源立寺内

TEL (072) 751-3135

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料（含送料）年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計
〒振替 口座番号 0138012112649